

3	学校名 住田町立世田米小学校 外4校	R4~R6
---	--------------------	-------

令和6年度研究開発自己評価書

I 研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

本研究開発は、町内の小・中学校及び県立学校が町教育研究所と連携し、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指し、取り組むものである。

全ての校種が目指す資質・能力「社会的実践力」を12年間という長いスパンで育成していくために、地域と学校が子供の成長についての展望をこれまで以上に共有し、人材育成に関わる関係者の参画を促すことが可能となれば、地域の活性化にもつながることを期待し、小学校から高等学校までが一貫して地域資源を学習材とした横断的で探究的な学習活動に取り組む新設教科「地域創造学」を中核に据えた教育課程を編成した。教育課程の特徴は以下の通りである。

① 社会的実践力について

本研究においては、育成を目指す「社会的実践力」を以下のように定義した。

【社会的実践力】

児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

社会的実践力として形作られる12の資質・能力を規定し、大きく「地域理解」、「社会参画」、「人間関係形成」、「自律的活動」の4つに分類し、育ちと学びを滑らかに接続していくために、発達段階を保育園の年長児も含めた5つのステージのまとまりで編成した。

【社会的実践力を形作る12の資質・能力】

社会的実践力	A 地域理解	☆見通す力	他教科等との汎用性
	B 社会参画に関する 資質・能力	☆多面的・多角的に考える力	
		☆提案・発信する力	
		★好奇心・探究心	
		★困難を解決しようとする心	
	C 人間関係形成に関する 資質・能力	☆伝え合う力	
		☆協働する力	
		★他者受容	
	D 自律的活動に関する 資質・能力	☆自己を見つめる力	
		☆調整する力	
		★自己肯定感	

【発達段階に応じて編成した五つのステージ】

- ・第1ステージ：年長、小1、小2
- ・第2ステージ：小3、小4
- ・第3ステージ：小5、小6、中1
- ・第4ステージ：中2、中3、高1
- ・第5ステージ：高2、高3

さらに、12年間をとおして、町全体で目指す子どもたちの育ちの姿を俯瞰しながら、地域創造学で育てたい資質・能力の確実な育成に向け、社会的実践力の系統表を作成し、五つのステージにおける社会的実践力について、その系統性を明らかにした。この表に示したものは、各ステージにおける発達段階に応じた学びの様相としてまとめているものであり、到達目標という意味合いというよりは、子どもたちの学びの姿を目安として整理したものである。

【各ステージにおける社会的実践力の系統表（一部抜粋）】

☆ 汎用的スキル		★ 態度・意欲・学びの価値		第1ステージ					第2ステージ		第3ステージ	
資質・能力の分類	A～Dに関する各資質・能力とその定義			基礎	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	
		A 地域理解	自分たちの地域の自然や人々のくらしの様子、歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解し、ふるさとに愛着をもちながら町の発展・創造に関わる自分の役割等を捉える資質・能力 ・地域づくりの基盤となる、地域の事象への基礎的な理解。 ・地域を創造する主体である、自己の役割への理解。		地域の事象と関わる体験的な活動を通して、地域にはどのような事象があるか理解し、そのよさを捉えることができる。	地域の事象について問題を見出し、探究活動の計画を立てることができる。	地域の事象について、自分との関わりから問題を見出し、予想や仮説をもとに探究活動の計画を立てることができる。	地域	地			
B 社会参画に関する資質・能力 地域の事象(ひと・こと・もの)の理解に基づき、身の回りには課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信することに関する資質・能力	1 ☆見通す力	【☆見】	・自分や集団にとっての課題や問題を見出す問題発見力。 ・目標の達成に向かって、解決の道筋を見通し計画する力。	地域の事象と関わる体験的な活動について、思いや願いをもち、手順を考えたり計画を立てたりして活動することができる。	地域の事象について問題を見出し、探究活動の計画を立てることができる。	地域の事象について、自分との関わりから問題を見出し、予想や仮説をもとに探究活動の計画を立てることができる。	地	域				
	2 ☆多面的・多角的に考える力	【☆多】	・事象の特色や関連、意味や意義などを考察する力。 ・問題解決のために何を活用して何を行うか構想したり判断したりする力。	地域の事象にはどのようなものがあるか気付いたり、そのよさを考えたりすることができる。	地域の事象の特色や関連について、比較したり関連付けたり総合したりして考えとともに、地域の事象と自分との関わりについて考えることができる。	地域の事象の意味について、比較したり関連付けたり総合したりして考えとともに、地域の事象への関わり方について考えることができる。	地	域				
	3 ☆提案・発信する力	【☆提】	・よりよい地域づくりに向けた取組を提案する力。 ・考察したことや構想したことを効果的に発信する力。	地域の事象と関わる体験的な活動の中で感じたことを、言葉や文、絵などで表現することができる。	地域の事象について探究した内容について、相手に伝わるように表現することができる。	地域の事象について探究した内容について、相手に応じて効果的に表現することができる。	地	域				
	4 ★好奇心・探究心	【★好】	・身の回りや地域の事象に興味・関心を持つ態度。 ・知りたいことや解決したいことをみつけようとする態度。	地域の事象に関心をもち、積極的に関わろうとする。	地域の事象について関心を持ち、課題をもちながら、積極的に探究しようとする。	地域の事象に関心を持ち、探究活動の価値を考えながら、積極的に探究しようとする。	地	域				
	5 ★困難を解決しようとする心	【★解】	・失敗してもあきらめずに挑戦しようとする態度。 ・困難な場面に直面しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする態度。	自分の思いや願いに向かって、最後まで活動等ややり遂げようとする。	思いの実現や目標に向かって、自分のやるべきことを粘り強く最後までやり遂げようとする。	思いの実現や目標に向かって、困難な場面に直面しても、自分のやるべきことを粘り強く最後までやり遂げようとする。	地	域				

② 地域資源を学習材とした系統的な学びの在り方について

【地域創造学の目標】

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

上記の目標にもある通り、地域創造学においては、住田町及び近郊地域社会に溢れる地域資源を学習材にして、小・中・高の児童生徒が、探究的な学習活動を意図的・計画的に行っていく。

「意図的」とは、その時期だからこそ学ぶ意義や価値が大きい学習内容を、ふさわしい学びのステージに位置付けることである。「計画的」とは、学習内容のつながりや学習方法、児童生徒の資質・能力の系統性を吟味して位置付けることである。以下は具体的に行った学習内容の一部を示したものである。

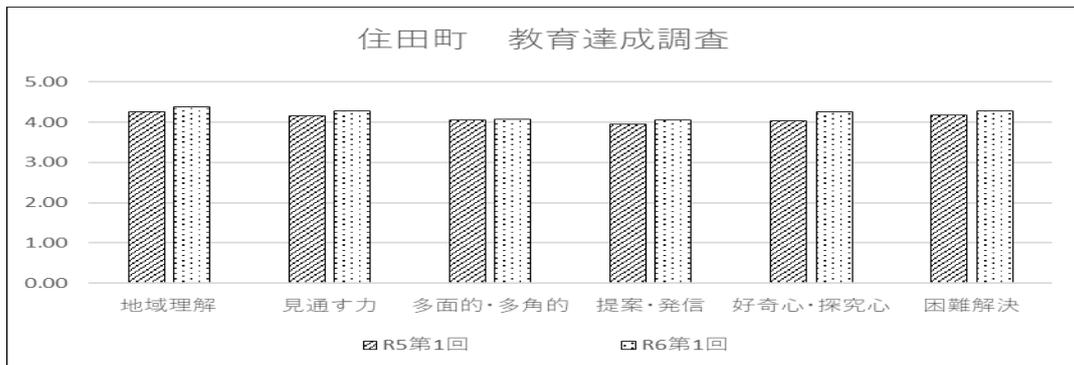
- ・住田の産業を通してこれからの町づくりを考え、発信する学習
- ・住田町のよさや抱えている課題を学び、実践的な行動を通して地域へ貢献する学習
- ・住田固有の有形無形の文化遺産や、先人の残した文化的業績の価値を享受する学習
- ・住田と世界のつながり等に目を向ける国際理解に関する学習
- ・地域の中でふるさとの発展のために力を注ぐ人々から生きる事や働くことの意味を学ぶ学習
- ・学校や地域が一体となって取り組む活動へと発展的に広がる学習

(2) 教育課程の内容は適切であったか

本年度、他校の教員が各学校で実施する校内授業研究会に参加することのできる相互交流事業を継続して実施し、授業実践内容を共有した。研究会においては、ねらいとする社会的実践力を育成するための学習内容及び単元構成となっているか、学年やステージ、校種の系統性を意識して社会的実践力を育成していくための学習内容や指導方法、評価方法等について、学校や校種を超えて協議を行った。意図的・計画的に地域創造学を実施していく中で、児童生徒が主体的に探究活動に取り組む姿が表れてきていることなど、地域創造学を位置付けた、体系的に一貫性のある教育課程を実施することが、これから求められる資質・能力の育成に有効であるとの共通認識を持つことができた。

地域創造学を通して児童生徒の学習への達成感等がどのように変容したのかをとらえるために育成を目指す12の資質・能力に合わせて作成した12の質問項目で行う教育達成調査を令和元年度から住田町内の小・中・高の児童生徒を対象に実施している。昨年度と今年度の調査において住田町の小・中・高の児童生徒の平均値を見ると、「地域理解」や社会参画に関する資質・能力である「見通す力」、「困難を解決しようとする心」などが引き続き高い値を示している。

【住田町教育達成調査 町内小・中・高 児童生徒】



※教育達成調査の質問項目

- ・「地域理解」・・・「地域に関する学習は、自分に役立っていて、「地域は大切だ」と思うようになり、地域が好きになった。」
- ・「見通す力」・・・「自分たちの地域には、どのようなよさや問題があるのかを見つけて、問題の解決のために見通すことができる。」
- ・「多面的・多角的に考える力」・・・「地域のことについて正しい情報をもとに、自分の考えがふさわしいかどうかを、その理由も明らかにしながら考える」
- ・「提案・発信する力」・・・「地域のためになることをあれこれ考えたり、生み出したりして提案や発信ができる。」
- ・「好奇心・探究心」・・・「地域のことについてもっと知りたい、調べたいと思うことがたくさんある。」
- ・「困難を解決しようとする心」・・・「思った通りに進まないことがあっても、あきらめないでやりとげようとする。」

【教育達成調査シート（一部抜粋）】

◆次のア～シの項目について、現在のあなたは、どの程度当てはまりますか。当てはまると思った数字一つに○をつけてください。このアンケートは、学習の成績には関係ありません。

質問内容	当てはまらない	まったく当てはまらない	当てはまらない	どちらからとも言えない	当てはまる	よく当てはまる			
ア 地域に関する学習は、自分に役立っていて、「地域は大切だ」と思うようになり、地域が好きになった。	1	-	2	-	3	-	4	-	5
イ 自分たちの地域には、どのようなよさや問題があるのかを見つけて、問題の解決のために見通すことができる。	1	-	2	-	3	-	4	-	5
ウ 地域のことについて正しい情報をもとに、自分の考えがふさわしいかどうかを、その理由も明らかにしながら考える。	1	-	2	-	3	-	4	-	5

いわゆる地域に対する価値の発見や課題を解決するために必要な能力に関する部分に関しては、地域をフィールドに探究活動を展開する「地域創造学」を中核とした教育課程を継続して実施している事による効果が、安定して表れていることが推察され、教育課程の内容は適切であると捉えている。

(3) 授業時間等についての工夫

必要となる教育課程の特例として、

- ① 小学校では、生活科、特別の教科道徳、外国語活動、外国語及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1学年106時間、2学年110時間、3、4、5、6学年では85時間設定した。
- ② 中学校では、1、2学年においては国語を減じて、また、全学年において、特別の教科道徳、社会及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では59時間、2、3学年では79時間設定した。
- ③ 高等学校では、全学年において総合的な探究の時間を減じて、「地域創造学」を1単位35時間設定した。

2 指導方法・教材等

(1) 実施した指導方法等の特徴

① 体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方

児童生徒が学びの意義や価値について実感を持ちながら学習が展開できるよう、特に、体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について考える実践を展開することが出来た。

以下は、本年度、各校種で地域創造学に位置付けた体験活動の種類をまとめたものである。第1ステージから第2ステージは、地域のよさに気付き地域の理解を深める活動を、第3ステージから第5ステージにかけては町の課題に主体的に向き合い、課題を知ることや課題解決に取り組む探究活動を取り入れていくことができた。社会的実践力の系統表を基に、ステージの段階によって何を目指していくのかについて校種を越えてさらに議論を重ね、共通理解を図っていく。

【地域創造学に位置付けた体験活動】

小学校	中学校	高等学校
学校探検、植物の栽培、町探検、郷土芸能、水生生物調査、キャップハンディ体験、野外活動（種山高原）、町のよさや課題を考える活動（町内でのリサーチ、まとめ）等	町の魅力を高めるためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践等）、職場体験等	町の課題を解決するためのプロジェクト活動（町内、町外でのリサーチ、プラン作成と実践）等

② 住田型探究のプロセスの実施

平成30年度までの実践の結果、一般的な探究のプロセスは、「問題の理解」をスタートとし、「課題設定」、「情報収集」と進んでいくことが多いが、プロセスはいつでも一方向とは限らず、時に「実施・改善」と「見直しを持つ」のプロセスが往還されたり、「問題の理解」からではない段階が起点となって学びが始まったりすることが明らかになった。そこで令和元年度からは、新たに本町における探究の六つのプロセスを設定して、実践を進めている。地域創造学では「①現状把握・問題の理解、②課題設定・課題への気付き、③情報収集、④見直しを持つ・計画する、⑤実施・改善、⑥まとめ・振り返り」というプロセスが発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開している。六つのプロセスは①から⑥へ向かう一方向に限定せず、児童生徒の進行状況を詳細に見取りながら、学習状況に応じてプロセスを往還することなども含めて、探究活動を柔軟に行わせることができた。

③ 言語活動の位置付け

充実した言語活動を活動の中に適切に位置付けることは、思考力・判断力・表現力等の育成を図る上で重要である。また、他者と協働してよりよい考えを作り出したり、方向性を見出したりする上で、コミュニケーションに係る資質・能力は必須である。探究のプロセスの中で、学んだことを発表する場面では、主体的な活動を通して形成された自己の考えを他者に伝える際、的確に伝わるためには相手意識を持つことが大切な視点であることに留意して指導を行った。その結果、各自のテーマに基づきながら探究活動の報告を行う「プロジェクト発表会」では、自分が伝えたいことについてポイントを押さえながら発表しようとしたり、発表者の伝えたいことがより伝わりやすくなるようにアドバイスしたりする様子が見られ、学びが深まった。

④ 主体的な思考を促す適切な支援

児童生徒の主体的な思考を促すための適切な支援の在り方については、校種を越えた議論の中で、探究のプロセスを意識した指導や発問の質に関して活発に意見が交わされた。これまでの取組における児童・生徒の実践例を基に検証を進めた結果、教師が一方向的な探究のプロセスを押し付けるのではなく、探究段階に応じて粘り強く生徒に寄り添いながら、「問い」を通して新しい視点に気づかせるような支援を行うことが、児童生徒の主体的な思考を促進することにつながることが明らかになってきた。教師は児童生徒の探究活動を力強く誘導するのではなく、横に寄り添って支え、児童生徒の主体的な活動に対して必要に応じて適切に支援していく、いわゆる「伴走者」としての考え方が地域創造学における指導方法の土台であることを町全体で再確認した。

⑤ 地域創造学に関する異校種の指導との接続について意識した指導の工夫

令和3年度末に行われた、ステージ内及びステージ間での学習内容の系統性や反復性、学習方法の積み上げがより効果的となるよう年間指導計画の改訂を受けて、各ステージにおける社会的実践力の系統表や改訂した年間指導計画を基に実

【本町における探究の六つのプロセス】



際に授業実践を進めた。小学校から高等学校までの12年間を見通した上で、次のステージを見据えて当該学年では何を重点的に指導していかなければならないのか、校種を越えて活発に議論を行った。校種を越え、小・中・高の12年間でいかに滑らかに児童生徒の社会的実践力を育成していくのかについては本研究開発の根幹にあたる部分であり、今後も実践結果を基にした議論を重ね、よりよいカリキュラム開発に取り組んでいく。

⑥ 教科横断的な視点による資質・能力の育成

「地域創造学」が教科横断的な視点から実施されるようにするために、地域創造学の各単元の学習内容と関連が深い教科・領域について整理し、教科横断的な視点で育成することを目指して関連表の見直しを図った。各教科等が固有に持つ特質と、社会的実践力との関連する幅には違いがあるが、社会的実践力が形成される過程では、子供たちが今後生き抜く社会を意識し、未知の状況においても発揮され、生きて働く力として他教科等との学習と相互に関連付けられた学習が必須であり、教師が教科横断的な視点で指導を行った。

⑦ 児童生徒同士の校種間交流について

地域創造学においては、町全体の小・中・高で目指す資質・能力や内容、指導方法及び評価方法を共有している利点を生かし、単元の内容に応じて積極的に校種間交流を行っている。第4ステージの児童がそれぞれの学区に関わる「地域の歴史」を発表し合い、学びを深め合う同校種間交流や、小学生が中学生のプロジェクトを参観したり、中学生と高校生が互いのプロジェクトを参観し合ったりする異校種間交流が計画に位置付けられている。同校種間で学びを深め合うことはもちろんのことであるが、異校種の先輩や後輩と共に学び合うことも、児童生徒の学習意欲に前向きな効果を与えるものと考えられる。

⑧ 評価方法の工夫

地域創造学の本格実践を機に、町内の小・中・高が共通してポートフォリオ（学びのあしあと）を活用している。ワーキング・ポートフォリオ（青色ファイル）とパーマネント・ポートフォリオ（黄色ファイル）の2つのポートフォリオを使い分け、ワーキング・ポートフォリオには1年間の学びを蓄積し、パーマネント・ポートフォリオはその中から精査して残していく資料を12年間つないでいくために活用している。ワーキング・ポートフォリオに関しては、探究のプロセスの中で児童生徒自身が、自分が得た情報や学習内容を整理しながら集積し、単元末や年度末等の場面で、自分の学習を自覚的に振り返るツールとして活用することが各ステージ段階で定着してきている。また、パーマネント・ポートフォリオに関しても、中学校の生徒が小学校の時に蓄積した資料を活用して探究テーマを設定する等、ステージ間の学びをつないでいくツールとしての有効性を示す事例も多く見られるようになってきている。また、調査活動の際に一人一台タブレットも活用して資料を収集し、蓄積する姿も見られるようになってきており、ポートフォリオとタブレットの併用についても、引き続き検討していきたい。

さらに、児童生徒が「探究の六つのプロセス」を意識しながら、自身の探究のプロセスを主体的に振り返られるよう、各プロセスで目指す児童生徒の姿について住田型探究のプロセス「名人カード（小学校）・学びのコンパス（中学校）」を作成した。実践を通していく中で、児童生徒自身が探究のプロセスを自覚化するとともに、プロセスを可視化したことで、本時がどのプロセスであるかを捉えることができる児童生徒も多く見られるようになった。

★住田型探究のプロセス（名人カード）小学校

学習の過程	①しる・つかむ	②かいたきたでる・書く	③しるる・あつめる	④けいたきたでる・めんとす	⑤やっでる・めんとす	⑥かたどる・めんとす	
学習の過程	わたしたちのまちの「いいところ」って何だろう	わたしたちのまちの「いいところ」について話し合おう 調べる計画を立てよう 「いい すごいな」を伝えよう	たんけんに行つてわたしたちのまちの「すごいところ」を調べよう いろいろなじょうほうを集めよう	「すごいところ」を見つけるためのたんけんに行くじぶんびをしよう どのように伝えたいのだろう。	これまでの学習をふりかえり、くわしく調べたり、よりよきまとめたりするための方法を考えよう 世かに伝える練習をしてみよう	調べたことをまとめてしようかいしよう 「わたしたちのまちならではよき」についての自分の考えをまとめよう	わたしたちの住田町は、どんなまちでしょう どれくらい名人になれたか 学習をふりかえろう
名人になるためのポイント	2年生の「いいな」わたしたちのまちの学習を思い出そう わたしたちのまちの「いいところ」は？ どうして、そう思ったの？ 世小の3年生をびびりさせよう。	友だちの考えはどうかな。自分と同じかな。くらべてみよう。 どうしてその場所を調べたいと思ったのかな？ 世小の3年生をびびりさせよう。	どんなところに気をつけて調べようかな？ そこにかなる人には、どんな思いやねがいがあつめるかな？	「すごいところ」について知るにはどんな方法があるかな？ だれに聞いたら、自分の知りたいことがわかるかな？ どんな方法があったら、伝わるかな？	「すごいところ」を伝えるためにもっとくわしく調べたいことは何かな？ 伝えれば、分かったことや嬉しかったことをよく伝えることができるかな？ 世小の3年生は、ようこんでくれるかな？ 伝える方法には、どんなものがあるかな？どんな伝え方（まとめ方）をしたら、よく伝わるかな？ 住田まのことも聞ければ、住田町人だね。	どんなところが得意かな？ どんなところが得意になつたかな？ どうやったら得意になつたかな？	
笑顔	□気づいたことや考えたことをみんなに伝えることができた。	□くわしく知りたいことを決め、聞きたいことを考えよることができた。 □お話をききよって、伝えたいことを決めることができた。	□たけんに行つて、いろいろなじょうほうを集めることができた。 □お話をききよって、聞きたいことを決めることができた。	□たんけんに行つて、自分の知りたいことがわかるようになった。 □伝える方法をいろいろ試みて、決めることができた。	□「すごいところ」を伝えるために必要なことを見つけ、じょうぶに活動することができた。 □友だちの発表やアドバイスをきき、自分の発表をレベルアップできた。	□アドバイスをきき、調べたことをみんなに伝えることができた。 □住田の「すごいところ」について、お話をききよって、自分の考えをもつことができた。	□たんけんを通して、よかつたことや感じたこと、得意になつたことや、どうして得意になつたのかを伝えることができた。
いいね	□気づいたことや考えたことをみんなに伝えることができた。	□くわしく知りたいことを決めることができた。 □伝えたいことを決めることができた。	□そこにかかると人からきくよきじょうほうを集めることができた。	□たんけんに行つて、自分の知りたいことがわかるようになった。 □伝える方法を決めることができた。	□くわしく調べたいことを見つけることができた。 □自分の発表のアドバイスがわかつた。	□調べたことをまとめることができた。 □住田ぜんぶの「すごいところ」についての自分の考えをもつことができた。	□たんけんのおかげで、よかつたことや、感じたことをふりかえることができた。

2次・3次は青色の文字をみましょう

*どこから始めてもいいのです。たちどまったり、もどったりしてもいいのです。

★住田型探究のプロセス（学びのコンパス）中学校

3年 番 氏名 ()

学習の過程	現状把握 問題の選別	課題設定 課題への気付き	情報収集	調査しを持つ 計画する	実施・改善	まとめ（発表会）	振り返り
学習の過程	住田町の現状を把握するうえで、現在どのような課題があつて、どのような取組がなされているのだろうか？	1. 現状を把握する中で、自分は何んな課題についてテーマを設定してみようかな？	1. 自分の課題（テーマ）を解決するためにどのような情報を集めればいいのか？	1. 共通した課題をまとめるために、以下のような観点から時間を決めて調べよう。 ① 情報収集に何時間かかるのか。 ② 住田町の魅力アップや課題解決のためのどのような取組が考えられるのか。 ③ 発表に必要な準備としてポイントを作成する理由や根拠となる資料を作成する。	1. 学習を進めてみたり、課題がばやばやになつて、もう一度、課題を整理してみようかな？ 2. 調査をやり直してみようかな？（提案・発表）	1. 自分の調査したことや、その分析、考察を図やグラフ等に整理して発表しよう。 2. 発表は原稿を聴くようになりたいかな？（発表・発表）	1. やっぱり住田町でつばらしいな！これならもともと発表の力に足りないな！ 2. 〇〇さんの発表がすばらしいかった。自分もあんな発表ができるようになりたいな！
学習のポイント	設定する課題は一つに決めますが、住田町はどのような課題を抱えているのかについて様々な視点から理解を深めます。 解決策を探りたい分野を決めて課題を設定します。その際、自分の興味関心などに沿って断片的ではなく、例えば「どの年齢層の方々にとどの課題になってんだらう？」のように考えるとともに課題がしぼられます。	① 課題の現状を詳しく調べます。 ② 課題を解決するためにどのような情報を集めればいいのかを洗い出します。（多角的・多面的な見方） ③ アナログとデジタルの両者の良さを大切にしましょう。（複数の視点から情報収集する） ※アナログ：実際に現場に向つたり、住田町に聞き取り調査やインタビューを行う。図書館で関連資料を見つめる。 ※デジタル：インターネットの情報収集は限らないので注意する。	① 住田町の魅力アップや課題解決のためのどのような取組が考えられるのか。 ② 発表に必要な準備としてポイントを作成する理由や根拠となる資料を作成する。	① 共通した課題をまとめるために、以下のような観点から時間を決めて調べよう。 ① 情報収集に何時間かかるのか。 ② 住田町の魅力アップや課題解決のためのどのような取組が考えられるのか。 ③ 発表に必要な準備としてポイントを作成する理由や根拠となる資料を作成する。	① 学習を進めてみたり、課題がばやばやになつて、もう一度、課題を整理してみようかな？ ② 調査をやり直してみようかな？（提案・発表）	① 自分の調査したことや、その分析、考察を図やグラフ等に整理して発表しよう。 ② 発表は原稿を聴くようになりたいかな？（発表・発表）	① 地域の問題について新たな理解を深めることができた（地域理解） ② 地域の問題について解決策を考へることができた（社会参加） ③ 学習を進めていく中で、力を入れたこと、注意したこと、苦労したこと等（自律的行動） ④ 年度末（高校舎）はどのような課題に取り組みたいか（次年度への抱負）
学習を進めるよでの心構え	学習を自分でコントロールする ※困った時には自分から何で困っているのかを先生と相談してみましょう						
時間の計画	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間
時間の計画の例	4時間	5時間	8時間	6時間	21時間	8時間	4時間
学習のイメージ	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="text-align: center;"> <p>自分のニーズ ↓ 地域のニーズ</p> <p>課題解決の取り組み</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>まとめ（発表会）について</p> <p>こんな住田町になってほしい！！</p> </div> </div>						
学習のイメージ	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>A段階（もっと高いレベルの発表を目指そう！）</p> <ul style="list-style-type: none"> □理由や根拠を明らかにして調査内容を分析し、自分の考えをまとめる。 □調査内容や分析、考察などを図やグラフ等の資料も活用してまとめる。 □他教科で学習した知識・技能を活用してまとめている。 □原稿にこだわらず、状況に応じて発表を工夫している（相手意識）。 </div> <div style="width: 45%;"> <p>B段階（全員到達しよう！）</p> <ul style="list-style-type: none"> □理由や根拠を明らかにして簡潔に人にわかるようにまとめている。 □調査内容や分析、考察などを図やグラフ等の資料も活用してまとめている。 □原稿の読み上げではなく、自分の言葉で発表している。 </div> </div>						

(2) 指導方法等は適切であったか

実施した指導方法等の特徴に挙げた①～⑧は、いずれも12年間を見通して社会的実践力を育成していく上で必要な視点であり、児童生徒に応じた指導方法等の工夫として適切なものであると考える。今後も、継続して実践を行い、より有効な指導方法になるよう、質的改善を図っていく。

II 実施の効果

1 児童・生徒への効果

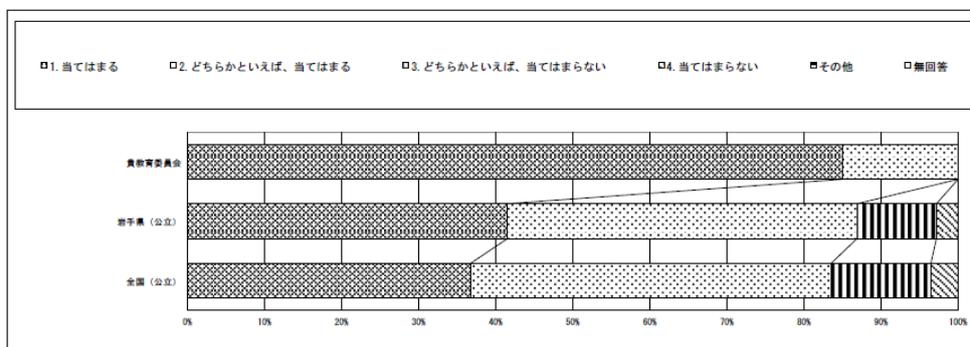
社会的実践力の系統表や単元計画、学習指導要領解説に基づいた地域創造学の本格的な授業実践から3年が経過した令和3年度末、12の資質・能力や単元計画の見直しを図った。令和6年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査（小学校6

年生)の「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」の質問に肯定回答する児童の割合は100%であり、県の肯定回答の割合よりも13.0ポイント、全国の肯定回答の割合よりも16.5ポイント高かった。また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」の質問(本町では地域創造学の学習と置き換えて回答)に肯定回答する児童の割合は100%であり、県の肯定回答の割合よりも14.5ポイント、全国の肯定回答の割合よりも18.7ポイント高かった。児童生徒にとって身近な地域資源を題材に、主体的に課題設定や情報収集などの探究のプロセスを踏んでいくことで、地域のよさについて体感的に理解を深め、地域の魅力をどのように発信すればいいのか模索する生徒、地域課題を自分事としてとらえ、これまでに培った知識や地域の方のアドバイスを活用して解決を図ろうとする生徒などが見られ、社会的実践力に関わる様々な成長の表れであると捉えられる。

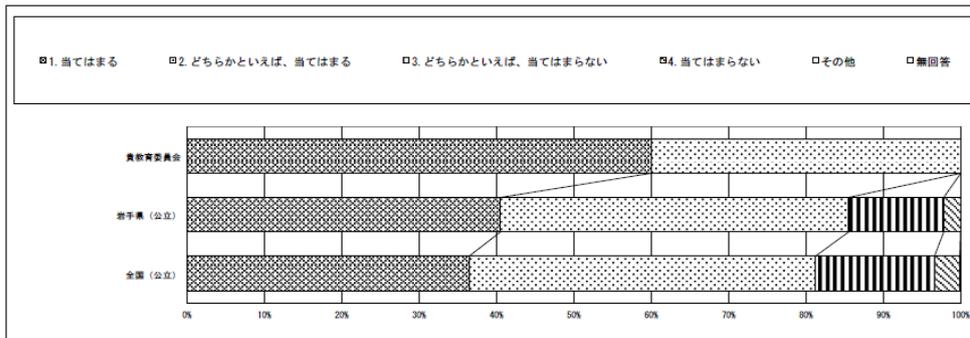
今後も、地域創造学の効果的な単元構成や指導方法、評価の在り方を模索するとともに、児童生徒の変容を、教師が見とり、価値づけ、適切に支援していくことが求められる。

【令和6年度全国学力・学習状況調査 児童質問紙】

質問番号	質問事項											
(25)	地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか											
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	無回答
貴教育委員会	85.0	15.0	0.0	0.0							0.0	0.0
岩手県(公立)	41.6	45.4	10.3	2.8							0.0	0.0
全国(公立)	36.8	46.7	12.9	3.5							0.0	0.0



質問番号	質問事項											
(38)	総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか											
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他	無回答
貴教育委員会	60.0	40.0	0.0	0.0							0.0	0.0
岩手県(公立)	40.5	45.0	12.3	2.2							0.0	0.0
全国(公立)	36.5	44.8	15.4	3.3							0.0	0.1



2 教師への効果

本年度も社会的実践力の系統表や改訂した単元計画に基づいて授業実践を行っているが、授業実践を進めていく過程において、児童生徒の実態に基づき、指導計画を随時更新しながら実践している例が見られる。このことは、児童生徒に社会的実践力を育成していくために、どのような指導内容や指導方法が適切であるのかを模索する意欲の表れであるとも捉えられる。また、児童生徒の学習状況を把握し、児童生徒に寄り添いながら、一緒に考えたり、視野を広げてあげたりしながら、共に走っていく伴走者として、教師が児童生徒の主体的な学びをサポートしてきた。さらに、授業研究会の相互交流を通して、「他校種の先生方がどのような点に留意して指導しているのかを改めて確認することができた。今後も、校種間連携を継続していく必要性を感じた」という声が異校種の教員から聞かれた。地域創造学に係る教職員アンケートにおいても「学校内だけでは解決できない課題について、地域の方々や関係機関、異校種間との連携が深まっていると感じる」等の回答も見られた。授業研究会の相互交流や各部会での協議等において、社会的実践力の系統表に基づいてどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきかなど、校種を越えた12年間の学びという視点で指導や評価の在り方について絶えず検討・見直しが行われている。

3 保護者等への効果

令和5年度末に地域創造学についての、小・中・高の保護者等にアンケートを実施した。内容は、「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか?」という項目に関して四段階評価で回答するものの他に、「有意義である(ない)と思う理由」や、「地域創造学に期待したいこと」を自由記述で回答するものを設定した。「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか?」という項目に関して、肯定的な回答の割合が高かった。その理由としては、「地域を知ること、更なる好奇心が掻き立てられ、地域への愛着が湧くと思うから」などの回答が得られた。「地域創造学に期待したいこと」の項目における記述内容としては、「子供たちを通して親も地域のことを知っていく、とても大切な授業だと思うので、今後も継続してほしい」などの回答が得られた。今後の地域創造学の学びをより充実したものにしていくための材料とするためにも、保護者や地域の声を多面的・多角的に分析しながら、地域全体の共通理解を図るための手立て等をさらに工夫していく必要がある。

また、地域の報道機関(町営ケーブルテレビ、新聞)とも連携し、子どもたちが取り組んだプロジェクト発表会の様子や異年齢による交流活動の様子が紹介されるなど、児童生徒の学びの姿を頻繁に情報発信することで、保護者を含む地域の方々の理解が深まってきている。本町のような小規模中山間地域ならではの貴重なツールでもあることから、引き続き連携を図っていきたい。

Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

1 カリキュラム全体の不断の見直し

社会的実践力の系統表や改訂した年間指導計画の内容が社会的実践力を系統的に育成していくものになっているか、共通単元を実施する際の学校間の協働学習等の在り方等、社会的実践力の系統表や単元計画等を含むこれまでに開発してきたカリキュラム全体に関して、児童生徒や地域、保護者、教職員の実態等を踏まえ、適宜

見直しを図っていく。これまでの実践によった指導方法や評価方法に関しても、他地域の先進事例等に学びながら、常によりよい方法を追究していく。児童生徒を対象として実施している教育達成調査や、保護者・地域協力者・教職員等のアンケートの回答結果に関して、これまでの取組や児童生徒の変容等を振り返りながら分析していく評価機会を小・中・高の教員が集まる町教育研究所全体会等において設定し、それらの分析結果を基に、「12年間で児童生徒の社会的実践力を系統的に育成していく学び」であるという視点を大切にした見直しを、長期的に進めていく。

2 評価の在り方について

地域創造学は12年間の学びであるということを意識しながら、学年や校種を越えて児童生徒に社会的実践力に関わるどのような変容があったのかについて、長期的に評価していくことが求められる。地域創造学では「探究の六つのプロセス」を大切にしており、生徒が自身のプロジェクトを実現する過程で、どのようなプロセスの中で、どのようなことに困難さを抱き、どのように乗り越え、社会的実践力に関わる変容や実践に最終的に結びついていったのか、そして教師はそれぞれのプロセスでどのような指導・支援を大切にしたことが社会的実践力を育成していく上で効果的だったのかということに関して検証していくことが求められる。探究の六つのプロセスを可視化して児童生徒の理解を促したり、児童生徒が自覚的に自身の変容を振り返ったり、教師が各プロセスを通しての児童生徒の細やかな変容を見取ってフィードバックしたり、価値づけたりする機会を十分に確保するためにも、各単元及び年度末等における「振り返り」の時間を計画に明確に位置付けた上で、児童生徒に、自身の探究のプロセスを自覚的に振り返らせることを大切にしていく。

3 社会的実践力を育成するための「地域創造学」教科書の開発・実施・改善

地域創造学において、児童生徒が主体的に探究活動を行っていくために試案として作成した小・中学校版の教科書の記載内容や活用の在り方の更なる改善を図るために検証を継続していく。「探究の六つのプロセス」を大切にした探究の進め方、これまでの生徒のプロジェクト活動等の実践例の記載、地域の先輩の実践事例を児童生徒が自身の学習過程の中で適宜参照し、新たな探究課題を見出しながら自身の探究活動を進めていくこと等、実践結果について部会を中心に検証していく。

4 持続可能なプログラムの構築について

町内の小・中・高が一体となって新設教科を据えた教育課程の在り方を探るために、町単独予算により配置した指導主事がコーディネーターとなり、地域社会や児童生徒の実態に応じた資質・能力及び系統表の独自設定や小・中・高の教員が共通理解しながら作成した12年間の系統的な単元計画の策定に取り組んできた。今後も異校種の取組を滑らかに接続させ、持続可能なプログラムにしていくために、ゲストティーチャーとの連絡調整や地域協力者会議の開催など地域とのつなぎ役になりながら、必要に応じて各学校及び教育研究所各部会等の主体的な取組を適切に支援していく町教育委員会の効果的な関わり方について検討を進めていく。また、持続可能なプログラムとなるために、これまでの取組が生徒や地域や保護者にとって効果的なものになっているか、指導する教員にとって無理のないものになっているかなど検証を行い、取組の内容を精選していく。